
とある混沌街の1日 先行公開短編

ルファイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある混沌街の1日 先行公開短編

【コード】

N6489P

【作者名】

ルファイト

【あらすじ】

とある混沌街と呼ばれる街のある日の出来事です

(前書き)

注意

捏造設定あり

原作キャラ×オリキャラCP多いです

こつこつものが苦手な方は今すぐ引き返してください

警告したので感想で書かれてもそこはスルーさせていただきます

小さな街

様々な人達が住んでいるこの街には名前がありません

しかしある一家の次女が言った街名が住民の間に流行り周りの街にも伝わりこの小さな街はこう呼ばれるようになりました

混沌街

と……

そんな混沌街のとある出来事を今回紹介いたします

短編タイトル「混沌街のクリスマス」

混沌街 フェンリルアパート

携帯を片手にいじりながら階段を降りてくる黄色のサイドポニーの

少女 亜北ネルは幸せを感じていた

「ああ〜レン君からのお誘い〜」

クリスマスの日にデートというテンプレ的な事情だがネルの乙女回路は全開なのだから許して欲しい

「あれ、ネルさんお出かけですか？」

「アリサ、そこはデートと言ってやれよ。」

買い物袋を持った二人組が声をかけた

雪降る冬の日へそ出し下乳綺麗なミニスカなロシア人女性 アリ
サ・イリーニチア・アミエーラ

銀色の長いストレートで背中を隠すほど長く瞳は黄金色に穏やかそうな雰囲気を纏わせた男性 ナユタ・戒堂・アルケートス

フェンリルアパートに同棲しているカップルである

「べ、別にデートなんかじゃ!」

「若いっ方がいいね〜。」

「ナユタ……18歳のあなたが言う台詞ではないですよ。」

「と、とにかく!それじゃあね!」

わたわたと慌てて去るネルを見てニヤニヤ笑うナユタ

「全く……最近リンドウさんに似てきましたよ。」

「……世界巡りに出て帰ってこないもんなんリンドウさんとサクヤさん。」

「アパートの大家でもある人が管理任せて旅するなんてここ以外ないですね。」

アリスと愚痴るナユタであつたがふと気づく

「ソーマは？」

「シオちゃんにデートを教えたコウタを殴った後渋々出かけていったみたいですよ。」

「……あのロリコンめ。」

そんな会話をしながら二人は部屋へと帰っていった

混沌街 翠屋混沌街支店

物静かな雰囲気の内と異なり厨房は戦場と化していた

「父上、クリームはこのような感じでよろしいでしょうか？」

濃い目の茶色のショートヘアー

そのクリアブルーの瞳は父上と呼んだ男性へと向けられている

「んっ……いい感じだ。それじゃセイはこのクリームをあの手伝いで入れて入れたら店のほうに出しておいて。その後はなのはの手伝いだ。」

「分かりました。」

少女　星光の殲滅者こと高町セイはせつせとシュークリームを作り始める

彼女は一度消失した身であるが何の因果かオリジナルである高町なのはの実家にてポロボロの姿で発見されオリジナルの家族にここにはいない同じ存在だった二人と共に保護され今に至る
当初はぎこちなかったが今はこのように家族として共に暮らすまでに仲良くなっていた

そんな彼女を見ながら背中を半分を覆うほどの赤紫色の髪を首元と先端を水晶をあしらったような髪飾りで纏めている男性はその青色の瞳で出来上がったケーキを見た後冷蔵する

「これで家用のはオツケーと……」

「テンマくん！お店のほう手伝ってー！ー！ー！！」

男性　神凧テンマはセイにシュークリームを任せると厨房から店へと出る

亜麻色のサイドポニーを揺らしながら一人の女性があたふたしていた

「なのは、お客が予約のケーキを取りに来終わったら店を早めに閉めて俺らのクリスマスとしようか？」

「それは魅力的だけどまずはレジ直してー！ー！」

女性 高町なのはが半泣きでテンマに縋る

「20にもなつてこれくらいで泣くんじゃない。」

「だって……直らないんだもん。」

頬を膨らませるなのはを他所にレジを直し始めるテンマ
その様子を見ていた客は皆いつせいに会計分のお金を置いて帰り始
める

機械に強いのはだがなぜか店のレジだけは直せない不思議な現象
これが起きた時慣れ親しんだ混沌街の常連様は皆お金を置いて帰る
のが暗黙の了解となっていた

「……よし、直ったぞ。」

「ありがとう！テンマ君！ー！」

ひしつと抱きつくなのは

「母上、シュークリームができましたが？」

「ありがとう、セイ。セイはいい子だね。」

くしゃくしゃと髪を撫でるのは
気持ち良さそうに目を閉じるセイ

「そういえばフェイトとはやてが今度帰って来るみたいだぞ。プレ

シアさんがこの前嬉しそうにリンディさんと話してたのを見た。」

「あ、ライちゃんとヤミちゃんの検査終わったんだ？」

「結果は良好、今年は家族皆で年越し過ごすんだ！って叫んでたぞ。」

「あはは……去年は大変だったもんね。」

苦笑しながら談笑する両親を余所にセイは静かに常連が置いていったお金を回収していくのだった

混沌街 とある民家

緑色の髪をしたツインテールの16歳くらいの少女が食器を洗っている

「カイト兄さんとメイコ姉さんは出張中、ルカ姉さんはお店があるから……今年のクリスマスは静かに迎えられそうかな。」

「お姉ちゃん遊ぼうよ！」

「遊ぼう！」

お姉ちゃんと呼ばれた少女 初音ミク

彼女をそのまま9歳にしたような少女 ちびミク

さらに小さく6歳くらいの少女 ぷちミク

彼女達が初音3姉妹と呼ばれ冒頭の混沌街と街名がつくきっかけと

なつた次女とはちびミクのことである

「んー……ちよつと待ってね。お姉ちゃん食器洗い終わらないといけないから、ね？」

「えー」

「えー」

不満そうな声を上げるちびミクとぶちミク

「なら代わりに僕が遊んであげようか？」

黒いコートとスラックスが映えるプラチナブロンドの髪にサファイヤを思わせる青い瞳の少年が声をかけた

黒コートから覗く腕には白銀の手甲が着けられている

「クーお兄ちゃんだ！」

「クーお兄ちゃん！雪合戦しよ！」

ちびミクとぶちミクが少年　凜音クーの手を掴もうとするがそれを避ける

「その前にミクに用事があるから少しだけ待っててな。」

台所に入り持っていた箱を冷蔵庫に入れる

「後で皆で食べよ。翠屋のシュークリーム買ってきたんだ。」

「ごめんねクー。あの子達の遊び相手に毎回なってもらっちゃって……」

「いいや、楽しくてやってるんだから気にしないでよ。バトルロイドとして作られた僕がこんな平和に暮らして」

「クー！」

クーの言葉を遮るように叫ぶミク

あまりの大声にちびミクとぶちミクも動きを止めミクのほうを見る

「確かにクーは戦うために産み出されたかもしれないけど……私達みたいに平和に暮らしてもいいんだよ。」

「ミク……」

クーを見上げその手をそつと握るミク

「カイトお兄ちゃんやがくぼさん、シグナムさんにヴィータさんも言ってたでしょ。これからその力をどう使うかが大切なんだって……クーがその力を使うのは私達との日常を守るためだけって約束したよね？」

「うん……」

「忘れないでよ……」

少しか潤んだ瞳で見上げるミクを見てクーは思わずその肩に手を置く

互いに目が合う

そのまま近づき唇が触れる

ギシッ

寸前に床がきしむ音がし慌ててミクが離れる

音のしたほうを見ればニヤニヤしたちびミクの姿

「これはリンお姉ちゃんに言わないとだめだね！」

「だめだね！」

「こ、こらーーーーー！待ちなさーーーーーい！！！」

走っていくちびミクとぶちミクを追うミク

それを優しげに見つめるクー

「んっ？」

ポケットから携帯を取り出す

「もしもし？」

『クー？ハクだよー。』

電話の相手は年長組の一人 弱音ハクだった

『ちょうどカイトとメイコと仕事先で一緒になったの。で、飲んで帰るから今日はお願いなね。』

「えっ！？ちよ、ちよっとハク姉さん！！……って切られた。」

走り回る3姉妹を見ながら一人ため息をつくクーであった

混沌街 中央公園

ちよつと長めのマフラーを巻いたネルは来るはずの彼を待っている

「遅いなあ……」

「ごめんネルさん！」

ぱたぱたと走りながら手を振っている金髪の少年

「キャラメルミルク買って来ようと思ったんだけど翠屋が混んでて……しかも来る途中転んでダメにしちゃって……」

「気にしないでレン君！それよりほら早く行こう！」

少年 鏡音レンの首にちよつと長めだったマフラーをネルが巻く

「ね、ネルさん！？」

「れ、レン君が寒いかなって思ってたんだけどだから！それ以外に意味なんてないんだからね！！」

周りの人たちのニヤニヤに気づかないネル

それに気づいたレンは慌ててネルの手を引きその場を去る

「青春ですね……ハヤト。」

「そうだねクラレット。さてそろそろ帰って夕飯の準備しないとカシス達が暴れまわるからな……」

買い物袋を両手にぶら下げた二人組も公園からいなくなるというものの静かな公園へと元に戻っていった

混沌街 鏡音家

両手に買い物袋を持ったネルとレンが歩いている

「あの映画凄かったね。あの悪ノ娘に続く作品だけあって私引き込まれちゃった。」

「悪ノ召使って初めて見たけど……なんか他人のように思えないほど感情移入しちゃったよ。」

映画を見た後レンの買い物にネルが付き添いそのまま夕食に誘われたネルはそれを受けたのである

「あれ？レン君家の電気ついてないよ」

「えっ？ほんとだ……リンの奴今日は家にいるって言ったのに……」

玄関の鍵を開けるがやはり人の気配はなくリビングへと移動する
電気をつけるレン

テーブルに書置きがあるのに気づきそれを読む

『レンへ。御坂さんに誘われたから留守番よろ

追伸 ネルさんと仲良くするんだぞ』

紙をくしゃくしゃに丸め投げる

「余計なお世話だ！全く……」

エプロンを着けるとレンは台所に向かう

「さて作るか！ネルさんは座っててよ。」

「えっ！そんなの悪いから何か手伝わせて。」

という流れでネルも手伝い夕食を食べた二人は片付けも終わるとレンの部屋に移動していく

大抵楽しい時間というものは当人達が思うより早く過ぎていく
時計を見たレンはネルに聞いてしまう

「ネルさん時間大丈夫なの？」

「……レン君私ね、ちょっと聞いて欲しい事があるの。」

疑問顔のレン

ネルは内心高鳴る心音と共に緊張していくのを感じ取っている

「ね、レン君は私のことどう思ってる？」

「ネルさん……?」

「私は……レン君のこと大好き。友達じゃなくて男の子として好き。」

ネル、一世一代の告白である

「……」

「……」

互に見つめあいそのまま時間がすぎる

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………何か言いなさいよ!!」

我慢の限界に達したネルが顔を真っ赤にし叫び暴れ始めた

「ネルさん!」

「はひゅわんむ!!」

そんなネルの唇をふさぎながらベッドへと押し倒すレン
驚きから目を見開いていたネルだが次第に目が蕩けそのまま身を任
せる

そのままどれだけの時間が過ぎたのかレンがネルの唇から離れる

「……………ネルさん、俺もネルさんのこと好きです。」

「レン君……………」

「ネルさん……………」

潤んだネルの瞳

その瞼が閉じられ再び唇が重なった

翌日

目を覚ましたレン

目の前にはネルの顔

「ネルさん……寝顔可愛いなあ」

体を起こした瞬間視線を感じドアを見やる

「ぬふふ〜お楽しみのようにでしたね〜」

朝帰りした大きなリボンが特徴の双子の姉　鏡音リンがニマニマ笑っていた

「リリリリリリン!?!」

「これは皆に言わなきゃね!行くよジョセフィーヌ!!」
ベランダから飛び降り愛車のロードローラー”ジョセフィーヌ”に乗り込む

「まずはミク姉からだああああ!!」

「後で覚えてろリイイイイン!!」

そんな騒ぎのなかベッドで寝ているネル

「レン君……大好き」

この後怒り狂う事になるがそんな未来など知らずネルは幸せそうに

眠っていた

混沌街の住民に幸せあれ！！

(後書き)

以上クリスマス短編です

25日予約投稿でもよかったです

”そういう機能はあまり信頼できない” 性質なので出来上がってフライングさせていただきました

構想3日執筆2日

上手く軌道に乗る+仕事休みが合わさればこのペースなんですがね

……

オリキャラ設定に関しては敢えて乗せていません

最低限小説内で書いていますが……

一応長編予定なのでその時にでも書いていきたいかと思ってます

世界観としては現代ですね

MMDドラマに似ている世界なんですけど住んでる人が……

感想のほういただけると嬉しいですがね

合言葉は

レンネルは砂糖増産バカップル!

です

ではでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6489p/>

とある混沌街の1日 先行公開短編

2011年1月3日21時20分発行